

2015-12

第51号

全国拡大教材製作協議会

会報

代表世話人 佐藤 邦隆

〒108-0073

港区三田 3-7-26-405

Tel・Fax 03-3453-3052

<http://www.kakudaikyo.org/>

第4回 勉強会を終えて

全国拡大教材製作協議会 代表世話人 佐藤 邦隆

拡大協会員にとっては、今の時期は弱視児童生徒に思いを馳せ、視覚障害者に対する学びの環境の厳しさと弱視児童生徒たちの計り知れない苦難のことに気をもむ機会が特によくあります。しかし、最近その実態が以前に比べて頭に思い浮かびにくくなっているとの嘆きの声も聴かれます。弱視者への支援を行っている者として、現実を表層でしか、あるいは人伝に聞くことでしか把握していないことに皆が忸怩たる気持ちになるのも当然です。

先月、第4回勉強会を開催しました。第3回までの勉強会を通じて各グループが必要な知識と伴に一步踏み込む勇気を得たことで、自己変革をするための心構えを強めることができましたと思います。製作実績にもその変身の成果が見え始めました。今年度の勉強会は、こうした経緯を踏まえて、利用する弱視児童生徒の現場の様子をより深く知ることによって、行動する情熱をより高めようと企画しました。ご講演頂いた3人の講師の方は、まさに私たちこの思いを満たしてくださいました。お話の一つ一つに臨場感が溢れていて、出席者たちは引き込まれ、胸が熱くなりました。

ただ、利用者のことを知るということは、今ほんの序ノ口に行きついたらばかりであるということを忘れないようにしないといけないと思います。これから、こうした機会を増やしてもっと奥深いところまで知るように心がけたいと思います。

勉強会の後で講師の先生から、協議会の方々が機会を作って、都内にある11の弱視通級指導学級や5つの盲学校（視覚特別支援学校）を時々見学しこの目で把握することの有意義さをアドバイス頂きました。28年度以降はこうしたところに活動の重点を置くとよいであろうと思います。勿論、各地域にも同様のことが言えると思います。

つい先日ですが、筑波大学附属視覚特別支援学校高等部の「情報保障とボランティア」の講座で拡大教材のお話をする機会を頂きました。その後の生徒の感想文を拝見しましたところ、「図内の字のポイントや太線の太さなどもう少しこうなってくればなあ、とってしまう点もあります。ぜひ、利用者の声を直接聞いてくれる窓口やイベント、ボランティアを知りたいです。」「種類の教科書ができるまでに多くの人や時間が関わっていることを知り、このことを伝えていきたいと思いました。」「僕は拡大写本ボランティアということ初めて聞いたのですが、とても大変で、とても責任のあるものだ分かりました。また、(略)僕も何かボランティアをやってみたいと思いました。」などなどがありました。やはり今までは相互の交流が足りておらず、交流する意味が大きいと感じました。

今年も師走に入り、会員の皆さんはいよいよ28年度教材の拡大写本製作に取り掛かり始めたと思います。ご多忙の中、是非ご健康に留意されてお元気に製作にお励みください。



第4回勉強会が開催されました。

去る11月22日に第4回勉強会が開催されました。当日は曇天で少し肌寒い一日でしたが、情熱あふれる3名の講師の方々によるお話を伺い充実した会となりました。

講演内容を以下に抜粋で掲載します。詳しく知りたい方は様子をDVDに収めてありますので世話人会までご連絡ください。また、当日欠席の会員の方には配布資料を同封しています。ご確認ください。

配布資料 川嶋 栄子先生 全国拡大教材製作協議会第4回勉強会資料 (A4 1枚)
視力の弱いお子さまのために 教育相談のご案内 (パンフレット)
吉本 幸子様 配布資料 (A4 ホチキス止め資料)
ゆう様 ロービジョン・キッズたちの状況—もっと知ってほしいこと— (ホチキス止め)

弱視通級指導学級の現状と弱視教育研究会について

世田谷区立笹原小学校 教諭 川嶋 栄子先生

20年以上弱視児童(以下児童とします)の指導にかかわっておりますが拡大写本は児童にとって、とても役に立つ教材であり作成してくれるボランティアの方々へ感謝しています。今日はその活用の様子を伝えることで作成の役に立てばと思っています。

笹原小学校の弱視通級指導学級「目の教室」(以下目の教室と称す)は通級という形で地域の学校に在籍する児童が週に1回、2から8時間程度通ってきます。都内にこうした通級校が11校(現在1校休級)あり、盲学校は5校あります。学習は個別指導が基本でそのほかに小集団での活動も行っています。

通級は在籍校で普段は苦勞していることをどうすれば改善できるか考え、何を变えればよいのか、在籍校とも連携を取りながら、児童だけでなく保護者の声も含めて通訳する役目をしていると思います。

ここで「目の教室」の様子をビデオで紹介します。これは笹原小学校通常の学級4年生児童が障がいに対する理解を進めていく学習(総合的な学習の時間)として目の教室取材に来て目の教室の児童が答える形でビデオに撮り児童集会で発表したものです。

*ビデオの取材から

笹原小学校には現在19名通級しています。

区内だけでなく目黒区、三鷹市、狛江市、稲城市、府中市などからも通級してきています。

目の教室へは見やすくする道具の練習に来ていると道具を解説しながら紹介しています。

児童集会で上映後に作成者の感想あり上映は終了です。

*目の教室の紹介補足

地域との連携 拡大教科書の作成ボランティア(保護者や地域)

プレイルームの紹介 学習室のほかに鉄棒やマット運動、鉄棒など体を動かすことができるスペースがある

集団活動(月1回) サマースクール・大根掘りなど

*7通級の学習について

自立に向けて在籍校で頑張れるように補助していく形です。国語、算数中心で見えづらさにより理解しにくい部分を予習しておき在籍校での学習に備え理解が不十分な場合は復習もしてさらに理解を深めます。学習で使う道具に事前に触れて練習しておく事もします。コンパス、分度器、カッター、彫刻刀、ミシン他

*集団活動について

上野動物園企画のサマースクール 実際に生きている動物に触れて感触を知ることが大事。

さつまいもの栽培 苗を植えて収穫までを体験する。

いものつるを使って大縄跳びもする。普段は縄が見えにくくて挑戦しにくい仲間が一緒だと参加しやすい。

大根掘り体験 近所の農園の協力で収穫体験し大根は学校全体の給食に使ってもらう。

*在籍校での学習の様子

補助具の活用の様子 ノートと黒板を見るためiPadを机にセットしている。拡大教科書の活用 保管場所の確保 通常サイズの教科書も買って用意する。家庭学習の大切さ 週1回の学習を親にも学んでもらい、通級と通級の間は親にフォローしてもらう。

*学力テストの対応 東京都は5年生 文科省は6年生が実施、受験時の準備として時間延長、別室受験なので部屋や監督官の確保や問題の拡大版を用意してもらえるかの確認、補助具の持ち込みの許可確認などを連携して整える。

*7 遠近両用拡大読書器の紹介 在籍校の教室に置き、黒板や担任の先生を見る

拡大教科書について

児童にとってなくてはならないものである。教科書会社出版のものは文字サイズの種類が少ないため、児童の見え方に合ったものを選ぶには不足がある。レイアウトや文字等オーダーメイドがきくボランティア作成版は素晴らしい。低視力による見え方だけでなく色やまぶしさに対する対応、教科特性にも対応してもらえありがたい。国語、算数は毎日しっかり使うので細かい配慮が行き届いていて効果的に学習参加しやすく、より読みやすいボランティア作成ありがたい。出版会社の教科書は余白が多いため行が離れている方が読みやすい子はそちらを使うこともある。

*文字サイズの決定

視距離として15～20センチくらい離れてスラスラ読める大きさを考え勧めている。教科書作成の際、簡易的に作った弱視メガネを使って見え方の確認をする。紺の色画用紙にパンチで穴をあけ、セロテープを張り指紋で汚す物だがこの眼鏡越しに見ると太くて濃い字が大切なのがある。

*教科書サイズ

学年があがると教科が増えてランドセルがいっぱいになるため、A4サイズを使用していた児童も高学年ではB5サイズに変更してルーペ併用で対応するケースもある。

*副教材について

漢字ドリル 見本は黒くて太い字で見やすいがなぞりの部分がグレーで薄く困る。この場合には拡大コピーして本人の見えやすい色のペンでグレー部分をなぞる。鉛筆線が見えなくなならないよう確認が必要
漢字ドリルは在籍校で提出もあるのでしっかりと教えた
社会・資料集等 文字が小さくて困るルーペでもはっきりしない大きさが多。分布図、地図なども同様。

東京都弱視教育研究会（都弱視研）の活動から →研究会のパンフレット配布あり

都弱視研 都弱視研は都内の弱視学級11校と盲学校5校の先生方の研究会

国・都立と区・市立の学校と一緒に研究をしている団体は珍しく、貴重なネットワークといえる。月に1回会合を開き研究している。

*iPadの現状活用について・・・都弱視研の調査から（平成26年度）より

・使用状況の調査76人中 使用している19名（学校でも使用と回答）。平成27年度はさらに増えていると予想できる。

・使い方としては、カメラ機能で黒板や遠くを写して手元で見たり火を使った実験や生き物観察に使う
例 黒板に紙を貼って意見を書き込んでいく授業では単眼鏡でも見つけにくい。このためカメラで撮影して手元で拡大することで理解しやすい。持ち帰ってノートに書き写すことが可能

・その他 植物の成長確認 生き物の観察 花の咲き方鑑賞 体育の動作確認 高い位置の展示物確認
スーパーでは商品を撮影、中身、値段、賞味期限などが確認できる 天体観測、風景を見る等
都内盲学校高等部普通科では、教科書データをiPadに入れて教科書として活用。白黒反転機能や持ち運びが便利だが紙の教科書と併用する生徒が多い。数学や英語の授業で実際に隣に紙の教科書も置いて授業している風景を紹介

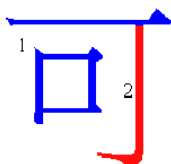
・有効なアプリの紹介

漢字筆順辞典 筆順をはっきり大きく見ることができ、覚えるので漢字ドリルと併用するととても良い

・パソコンとの比較

マウス操作は苦手なのでタッチパネル式のiPadの方がネット検索もしやすく弱視の生徒には良い。アクセシビリティを活用すればズーム読み上げもできるようになるので個々の見え方に合わせて使うことができる。

最後にボランティアの尽力や努力を無駄にしないようボランティア作成の拡大写本の存在と有効さを児童・生徒・保護者、学校、教育委員会に今後も伝えて続けていきます。



弱視の児童生徒の学習環境をよくしていただくために

吉本幸子

I. はじめに

娘は現在県立高校の3年生で、先天性緑内障・無虹彩症、視力としては右が0.1・左が明るさを感じるだけでお友達の顔はかなり近づかないと見えません。表情を伺うことができず、自分の発した言葉でお友達は嫌な気持ちになっていないだろうかといつも気を回して生活をしています。でも見えにくさを理解し自然にサポートをしてくれるお友達もでき、クラスのお客様ではなく一員となろうと頑張っています。

II. 見えにくさの理解の得にくさについて

娘の視力は片目0.1です。普通の方からみられると視力が低いほうになり全盲に近い方からだと良く見えるほうになります。娘を育てていく上で避けて通れなかったのは見えにくさの理解を得ることでした。大人子供に関係なく「何で・どうして」と尋ねられ言い訳のように説明をしなければならないことがとても苦痛でした。また、慣れた場所や慣れた人達と一緒にいると娘が目の悪いことを忘れてしまうとされます。娘は心無い人から「見えてないふり」をしている、普通に歩いたり本を読んだりしているのだから見えているとからかわれることもありました。確かに見えていますが見えていないのです。ここの処をご理解していただくのがとても難しいのです。弱視とは生活ができるくらい見えるようになるメガネが無いということです。見え方は10人いれば10人・100人いれば100人と違う見え方をしています。

外を歩いている風景の中から色々な情報・知識を得ることができます。私は娘を連れて歩くときには単眼鏡でなるべく風景を見せるようにしてきました。意識をさせる・確認をさせる事でぼやけた風景の中に興味を持たせ社会のルールや面白さを教えてきました。

また、中学校へ受験の相談に伺った時には弱視であることを伝え弱視の説明をさせていただきご理解を頂きました。

6年生からは1学期の初めに5分間、本人から自分の目の病気のこと、自分のできることできないこと、手伝ってもらいたいことのお願いとなどをお話するようになりどのくらい見えるノート聞いてくる生徒さんもいたので先生や親からの話ではなく本人から話す良いチャンスだったと思いました。

弱視の当事者・家族だけではこの見えにくさというものを多くの方々にご理解を頂くにはあまりにも力不足です。皆様からも弱視の子供たちの見えにくさを多くの方々にご伝えていただけますようお願いいたします。

III. 個人個人にあった文字の大きさの必要性

娘は生後8か月から週一回岡山盲学校の支援を受け単眼鏡を使う訓練のためにひらがなを3歳ぐらいから読メールようにしました。盲学校では見たいものは道具を使えば見えるということを教えていただきました。就学の前の年は単眼鏡で黒板を見て文字をノートに写す・板書写しや定規を使って決まった長さの線を引くことなど授業で困らないように訓練をしてくださいました。

絵本は色数が少なくはっきりして文字の大きなものを与えていました。好んでいたものはミッフィーです。本を読むのにも読む文字の大きさは本によって違います。また、小さい文字が読メールからと言ってそれに合わせて本を読んでも長続きはしません。

ルーペ等の補助具を使つての読書も大切です。視覚障がい者のために用意をされている書類は社会生活の中ではほとんどありません。タブレット等で容易に文字の大きさを変えて見ることもできるものも増えてきましたが実際の必要とされているものの中ではわずかなものです。ルーペを使つて人並みの速さで文字を読むことは多くの文字を読んで徐々に習得していけるものです。弱視の子供達の中には途中で読むことをあきらめメール子がいいます。まずは文字・文章に親しみ、本を読むことは楽しいと感じさせる。そのためにも低学年から文字を読むことに興味を持たせることがとても大切だと思います。それぞれに合った教科書の文字の大きさを選んであげることです。時間をかけて読みやすいものを探す、大切なのはどの文字の大きさが一番楽に本を読むことができるかです。楽しいとわかればルーペや拡大読書器を使いどんどん本や新聞を読むようになります。実際に娘は小学校1年生の2学期くらいから年間100冊は本を読んでいた。本を読んで本読みカードに書き込み先生に提出すると褒めて頂いてまたそれが励みになっていました。

IV. 拡大教科書・副読本・副教材について

岡山盲学校は幼稚部の併設がない代わりに「たんぽぽ学級」という未就学児を対象とした訓練・教育相談を開設しています。そこで出会った保護者の声掛けでできた拡大写本の会が岡山には2つあり、私はくらしき拡大写本に呼んでいただきました。自分の子供の為に・同じように困っている子供の為にと発足し勉強会を重ね拡大教科書を作成できるようになっていきました。

娘は弱視学級で国語・算数・習字を取り出し授業を受け、他の教科は親学級で受けました。娘が拡大教科書を使うようになったのは小学校3年生からでした。1・2年生では適応範囲内でしたが明朝体だったので細く

薄い感じはありました。漢字ドリルは文字が小さく弱視学級の先生がすべて拡大コピーをして下さいました。漢字のはね・はらい・とめは見分けるは難しくまた画数が増えると文字がつぶれて見え拡大したものが必要でした。拡大教科書は出版社のもノートボランティア作成のもノートの両方を使いました。拡大教科書は使用するに当たり見本を見て選ぶことができません。娘の場合は拡大写本の会で教科書を見せていただいていたので教育委員会へボランティア団体と教科書を指定してお願いをしました。学年が上がるにつれ出版社の拡大本が増えていきました。3年生で岡山市・4年生で岡山県を学習するのに授業は副読本が中心となりましたが拡大本は無く拡大コピーをして使用していました。中学・高校になりますとワークブックがどの教科にもあり拡大コピーで対応をしたものもあります。数学はノートに式を写して計算をするため式の写し間違いが多く苦勞もしました。副教材・ドリル・ワークブックも義務教育の間だけでも拡大教科書と同じように大きな文字の物をそろえて頂ければ子供たちの心の負担が軽減されると思います。

ボランティア作成教科書は分冊が多くあり1冊の重さも負担なく音読をしていたと思います。巻末の漢字も分冊でしたので活用できていたと思います。レイアウトも良く研究をされており使いやすいものだったと思います。ところが、ほとんどの弱視児童生徒の関係者は、ボランティアの拡大本は見たことが無く存在すらご存じありません。皆さんボランティアグループの活動が広く周知されるとよいと思います。

V. 7年間出版社拡大本を使わしていただいていたお願いしたいことは

出版社の教科書には当時定価が書いてあり 高い教科書だね と言われました。弱視学級なので加配もあり税金をたくさん使っている意味合いの事もいわれました。そういうことを子供たちの中では不満に思う子もおりいじめの原因の一つになっていました。

娘は中学生になり学校で一日に学習をする本・ノート・ワークブック・中学では英語・国語の辞書これらを背負って水筒・弁当・視覚補助具を別に持って白杖を持つての登下校をしていました。重い時で13キロのリュックサックを背負い歩いて登校していました。中学校では社会だけがボランティア作成本、残りの物が出版社の本でした。英語は文字の拡大を優先されて挿絵を削られていました。先生は教科書の内容を挿絵の説明や質問をされることで文章の雰囲気を生徒に伝えていました。英語の授業を数日されてから、拡大教科書を使うのをやめます。と言われ中学3年生まで先生が拡大コピーをして下さいました。国語も「行」への対応がないので同様すぐに使用ができないと言われ普通の教科書をルーペ使用で勉強しました。音楽の教科書は中学から出版社のものになりとても良い紙を使用されていることから開いてもすぐに閉じたり机から滑り落ちたりと扱いに困ってました。大きさも持ち運びに不便なので音楽室で3年間預かってもらってました。小学校ではボランティア作成本で大きな音符に歌詞がかいてありとても見やすかったけれど中学校は大きな本にはなつたけれど紙に対して文字が小さくて細くて見えにくかったと言っております。

ここで話をさせていただく事が決まり小学校中学校の弱視の子供達・保護者の方に拡大教科書の使いやすいところ・使いにくいところを尋ねてみました。皆さん出版社の本を使われています。出版社の拡大教科書に対して重要な要望が多く是非子供たちの立場になって仕様を考え見直していただきたいことです。

文字が大きく読みやすいがとにかく重く、自宅での予習復習は欠かせませんが教科書が重いので置いて帰るということを耳にします。紙素材の選定・分冊を多くするなど極力持ち運びが楽になるようにお願いします。普通の教科書の厚みぐらいで分冊を考えてほしいとの声も出ています。

拡大教科書の文字の大きさも選択肢を増やしていただきたいです。読メール文字と読みやすい文字の大きさは違います。

多くの弱視生徒また文字を読むことの苦手な弱視以外の障がいの生徒は文字が見えやすくなることで学習意欲も変化してくると思います。将来のために義務教育の中で身につけておかないといけない知識をつけるにはそれなりの努力が必要です。教科書は、その基盤を作る教材です。子供たちにお力添えをくださいますようお願いいたします。

VI. 大学受験へ向けて

高校に入学してすぐに大学志望校を書かされました。生物学部のある大学を出し、夏休みの宿題ではオープンキャンパスにとりあえずお友達と行きました。部活もあり大学も絞らぬままに3年生の5月ごろから模擬講義やオープンキャンパスの情報をネットから集め申し込みをしました。娘は自分が視覚障がい者であること・資料は指定のポイント数で用意してもらいたいことをメールでお願いしました。大学では来年から施行される障がい者差別解消法の整備も始まっており丁寧な対応をしてくださいました。受験をしたい大学が定まり入試課との話し合いを始めたのが7月でした。国立大学の措置は大学入試センターに準ずることとなっています。娘が18Pか22Pが読みやすいと言い22Pをお願いしました。時間延長は、弱視は通常の1.3倍、全盲は1.5倍となっており、他に個人に合った措置申請をします。この申請は8月からできます。申請書を書くのにも私だけでは難しく広島大学の先生・高校の先生に確認を取りながらの作成でした。また、問題用紙は明朝体で作られており拡大をしても見えにくいことが分かりゴシック体での用意はコストの面からも難しいとのことと通常のを拡大したうえで、同じものをPDFデータにし、iPadに入れていただきました。iPad

で見えにくい指数などを自分で見える大きさまで拡大できるのはとても助かりますが、できれば問題用紙はゴシック体でも用意していただけたらと思います。

国立・私立大学に関係なく見えやすい問題用紙のガイドラインを作っていただければと思います。説明をする方もされる方も1からの説明でお互いを知るところから始まります。どこの大学へ行っても入学試験は同じ対応が受けられることを願います。本人が行きたい大学・なりたい職業が見つからないのは障がいがあるなしに関係なく今の子供達には色々な経験が不足しているからだと言われていています。興味が無くても多くの事を経験させることにより面白さを見つけられることができるので特に視覚障がいの子供達には周囲の大人達が積極的に経験の場を与えることが必要だと思います。

おわりに

① 本人の言葉から

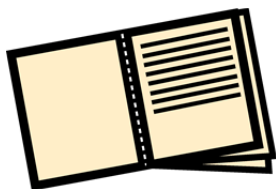
娘は中学1年生から視覚障害の生徒を対象とした化学実験やIT活用を体験できるキャンプに参加し全国に弱視・全盲のお友達を多く作ることができました。また、幼いころからハンディキャップを持ったお友達が多くいました。

自分のことだけを見れば勉強や人間関係が大変で辛くて苦しいことが多いと思います。しかし、自分と同じように視覚障害を持っているお友達がいることによって情報交換や学校生活での苦労を話したりすることによって大変なのは自分だけではない、もっと大変な努力をして頑張っている人がいることを知り色々なことに頑張れると娘は言っています。

② これまでに培った力で・・・な大人になってほしい。

最後に我が家では、幼い時からいつの日か自分の力で生きていけるようにと育ててきました。自分でできることは自分で、できないことを人をお願いすることは恥ずかしくないことといつも言ってきました。娘にお友達が掛けてくれた言葉は

君は色々なことに大変だけど不幸じゃないね。
ハンディを持って普通高校で学校生活を送ることは本人にとってかなり大変なことだと思います。もしこの学校に自分と同じ視覚障がいの生徒が受験をするときに 目が悪いと授業にはついていけないと先生方に思われぬよう後輩たちの為にそれが自分の使命のように頑張っています。なぜ、娘が県立中高一貫校という進学校で勉強をしていくことができるのかと思うと、就学前の盲学校での訓練、幼稚園から高校までの先生方・お友達・保護者・ボランティアの方々のご配慮があったからこそだと思います。これから大学生・社会人へと娘自身で成長していかなければなりません。自分に社会に責任を持てる大人になり何かしら社会に恩返しができるよう願っています。



私は双子の母親です。早産事故のため7か月で生まれてしまった子供達は、4か月もの間NICUで過ごしました。双子の1人は見えにくさと聞こえにくさの両方を抱えることになりました。子供達はもう中学生になりましたが、これまで保育園入園、小学校入学、中学受験などを振り返ると、周囲の協力が不可欠であるのに、見えにくい、聞こえにくいという状態やについて理解いただいたり、何が危険で何が必要なのかについて適切に対応してもらったりすることは、とても難しいことだったと実感しています。

皆様はそんな状況にある子供達のおき理解者という存在と考えています。それは本人のみならず親にとって心強いことです。日頃の感謝を申し上げるとともに、引き続きご協力いただきますようお願い申し上げます。

1、当事者には余裕がありません。情報入手も困難です。

親としての私は、初めての子育てに加えて、見えにくさ・聞こえにくさを抱えているから余計にベストを尽くしたい、けれども、何をすればよいのか分かっているわけではない、という状態です。手探りの中、アンテナを高くして、いいと思われることは何でも吸収しようとしていました。長い間、もがき続けていると思います。医学的なことも、教育的なことも、勉強しなければならないことだらけです。もう1人の子供のことも手を抜くわけにはいきません。仕事もあります。もう長い間、十分な睡眠をとれる状況にありません。子供達の命の維持から始まり、健康に大きく育てること、極めて重要な五感の活用に配慮すること、学校の環境を整えること・・・子供の成長とともに課題はどんどん変わっていきます。通常の育児書は参考になりません。弱視児童数は少なく、点在していることから、必要な情報は集約されていないのです。

拡大教材を知ったのは、子供が中学になってからです。中学では多くの副教材が必要とされ、その拡大対応に困り、筑波盲学校経由でご縁をいただきました。副教材の作成は全国初とのことでした。今までの方々がどうされていたのかと、非常に驚きました。

子供は小学校の時は26P t. の出版社作製教材を使っていたのですが、実はそれでは小さくて読みにくかったようです。協議会さんには40P t. で作成をお願いしました。しかし、1年使ってみて本人が、分冊数が多すぎることによって不便を感じ、次からは、30P t. へ文字サイズを下げ分冊を少し減らしてもらおう予定です。子供自身が使い勝手を考えられるようになる年頃になりました。反抗期ですが(笑)、嬉しく思っています。

私たちがいてきた跡は、決してよい結果ばかりではないのですが、子供の環境作りのための経験として知らぬ間に実績として積み上がっていました。そして、それらが、同様の子供を持つ保護者さんにとって参考になるということで「ロービジョン・キッズ・ラボ」(連絡先: trebeau888@gmail.com)という名前の情報交換会を開催したりしています。まだまだ気まぐれな会ですが、孤独になりがちな状態を解消するために意義ある会だと思っています。弱視の背景には子供の病気があったりします。親はそれだけで不安なものです。並行して日常のあらゆることに対応していかなければならず、余裕があるわけではないのです。私もまだまだ知らないこともあり、色々教えてもらいます。すぐに30名ほどに広がって、驚いています。情報が不足していることを表しているのだと思います。特別支援校、弱視学級、小児眼科医・・・情報入手の機会が幅広くあるといいと思います。

拡大教材を誰が必要としているのかについて、文科省の調査の結果を紹介しますと、特別支援学校より通常級の弱視生徒のほうが拡大教材を使っています。しかし、拡大教材があるということ知らないお子さんもまだまだ多くいらっしゃるかとされています。皆様によって作っていただいた拡大教材は、私の子供の周囲からは「見やすくいいね」と羨望の的です。是非、皆様の地域のお子さんたちにも拡大教材の存在を知ってもらい、必要な子供達に使ってもらえるようになるいいと思います。

2、環境づくりの実例、そして、教材は紙もITも両方必要！

私の子供の小学校で行った環境づくりについてご紹介します。差別禁止法施行後、合理的配慮を浸透させていく際に、こうした情報の共有は非常に意味があると考えます。

小学校入学の少し前に、筑波盲学校の先生をお招きし校内環境のチェックをしていただきました。黒板の文字が大きければ一番前の席に座ることで見えること、照度に問題ないこと、黒板の日光反射を防ぐために斜光カーテンが有効であること、下駄箱やロッカーに目印をつけること、危険防止のために階段には目印のほかに滑り止めが必要なことなど、学校側と共有するよい機会となりました。その後、担任の先生の日々のご意見も加わり、見えやすいチョークや教具が導入され、大きめの机や大きめの文字を使った辞書も用意されました。騒がしい教室においても、先生の声がマイクを通して補聴できるシステムも導入されました。私も、運動や休憩時間の危険防止のために衝撃に強いスポーツグラスを用意したり、保護者会で事情をお話ししたりしました。危険回避・見守りのために補助員の方がつきました。通級していた弱視学級(川嶋先生)

による特別授業も行っていただき、子供達の理解促進も進めました。多くの方に関わっていただき、同じ時間を過ごすことで、最初は特別と思われた細かなことも、みんなが同じ方向を向いて慣れていくようでした。周囲の子供達も頼りになる存在になってくれました。このような環境作りは学童や児童館でも役に立つことでした。

中学に入ってから、これらの経験を踏まえ、本人自身が他者の協力を仰ぐ練習をし始める年齢であると判断しています。しかし、文字の大きさは、本人だけではどうしようもない致命的な問題です。中学になると、教材の文字は本当にとっても小さいのです。みなさまの作ってくださる教科書や副教材は不可欠です。

副教材を作った初年度の感想です。副教材の使用頻度は、教科書並みに使うものときほど使わないものがありますから、何を優先して拡大するのか選別することが賢明でした。また、当然ですが、お願いしてから納品まで時間がかかるので、授業に間に合うよう早めに発注する必要があります。文字の形や色など、見やすさに配慮してもらえることはよいことでした。費用が結構かかるのは驚きました。全体像把握のため原本が返ってくると非常にありがたいです。私の方では、ワーク類はあえて紙での拡大をお願いしています。書き込みが直接できて提出の時もそのままできるので便利です。一方写真などの多い資料はiPadに取り込んでいます。iPadのような「電子媒体か、紙か」というような議論がなされることがありますが、利用者側からすれば、それは当然両方必要だということになります。使用頻度や色の多さ、何より、子供自身の使いやすさで選択できることが必要です。周りが勝手にどちらかと決める必要はありません。ちなみに、iPadの校内持ち込みについてはスムーズとは限りません。というのも、一般論として、最近の学校ではスマホは目の敵なのであり、iPadはスマホと同じとみなすこともできるからです。私のケースでは、通信不通とし、ゲームを削除して（笑）、特別な許可を得る必要がありました。

3、視力には、タイムリミットがあります

一般に、生涯に亘るいわゆる「生きる力」を養成するのに、乳幼児期の刺激が非常に重要と言われていています。視力については、8歳から9歳までに決まると言われました。この年齢までに見ることが楽しいと思わせることが必要です。本人以外が見えないと決めつけてあきらめてはいけません。ですから、小さいお子さんをターゲットにした拡大文字の普及はとても必要だと思います。

私の子供は、視力が弱いことに加え、視野が狭く、打撲で失明してしまう状態ですので、例えば、サッカーなどという活動はさせない選択もあり得ます。しかし、私は、活動をあきらめないで済むような環境づくりを意識しました。ボールが当たってもダメージを最小限にできる特別な眼鏡を作り、場合によっては役割を多少限定する（キーパーはさせないなど）の提案を行いました。私ができることは、子供が成長する上で重要な自然な欲求を妨げないよう、環境をととのえることと、リスクを踏まえて「腹を決める」ことでした。子供自身が困難と判断した場合にはやらないとのスタンスを学校とも共有していましたが、結果として、参加できない活動はほとんどありませんでした。ただし、子供からすれば、とても厳しく、大変だったかも知れません。

4、課題満載 一副教材、高校の教科書、受験問題、検定、・・・

お話ししてきたように、副教材の拡大は必須です。教科書と同値に使用する教材があるのです。作製費の負担面も考える必要があります。その意味では、義務教育の教科書は無料で拡大できていますが、高校になると費用面の不安は尽きません。文字が見えれば伸びる人材に、文字を与えないことがあってはなりません。途中で申し上げた乳幼児向けの拡大文字についても、塾が必要になった時の教材についても、全て拡大が必要です。拡大文字の情報が容易に手に入る時代になるといいと思います。それはきっと老化によって細かな字が見えにくい大人たちにとってもありがたいことです。

中学受験を経験しました。率直に申し上げて、そもそも拡大対応してくださる学校がほとんどありませんでした。高校や大学入試でも同様の課題は想定できます。機会均等が得られないでは困ります。受験は人生に重要な意味をもたらします。即座に改善されるべきです。

中学になると各種検定の機会が多くなりました。英検協会は拡大について定型的な対応を既に決めているので、逆に個別対応が困難になっているように思えます。数検協会は、例がないために個別事情を踏まえた対応を検討してくれましたが、試験会場自体が民間なので、試験時間の延長など個別の協力が得られる会場を探し出すことが困難でした。

以上のようにまだまだ課題は多くあります。あまり一般には知られていないと思いますが、皆様と現状を共有させていただきました。引き続きご協力いただきたいと切に願います。ありがとうございました。

第4回勉強会 質疑応答から

Q 文字の大きさを選ぶシステムの構築は全国的になされているのか

A 川島先生より

笹原小学校の例では教育相談に来た方には盲学校でMNリードなどの検査キットを使って検査し望ましい文字サイズを提案している

教育委員会へこのサイズを提示して教材入手の検討に入る

その他の検査方法もある。教育相談などの手順を踏んでいない場合には

就学相談時に学校が測定を相談するところへ促すなど案内をできるようにしている教育委員会と

そうでない教育委員会があるのが現状

Q 原本をもらうということについて 文科省では1冊となっているが？

A 川島先生より

保護者に購入してもらっている。学習の全体像が把握しやすいので見比べてもらったりしている

Q 文字を書くことに関してはどうしているか

A 吉本さん

盲学校の通級で幼稚園から板書写しをしていた。

四角を4分割したマス目のノートに黒板を単眼鏡でみて書き込む

視力が片方なのでなかなか四角に収まらないが先生からはきちんとは要求しないでよいとの事でした。

書道の授業で毛筆を習ったこと止め、はねがやっとなり理解でき字が定まったように思う。

ゆうさん

字はきれいに書いている。

大きくてもよいとしていたら自分で大丈夫な大きさが定まってくる。

Q 小さくてきれいな字のお手紙をもらうが読めているのなら教科書の字が適切な大きさか疑問が出たりするが授業の中では？

A 吉本さん

訓練はしていたが片方しか視力がなかったので黒板を見てノートを見ては同時にできない

眼鏡にルーペの機能を搭載したものをしている20センチくらい離れていても見えるので本とノートの行き来は出来る。

机は立てられるタイプのものでテストノートきは立てて使っている

書く作業は人の1.5から2倍の時間はかかる

自分にあった自分のやり方で慣れていくのでそれぞれかとは思

川島先生

低学年には丁寧に文字を教えるようにしている。はじめなのでしっかり身につけさせたいので。

ノートの線も薄い色では見えないので濃くはっきりしているものを使う

鉛筆の線は見えていない時が多い。自分の目で書いた形を確かめられないと不具合なので濃い鉛筆(6Bなど)を使ってみる。マジックで練習して書いた形を覚えてから鉛筆にするなどする事もある。

だんだん慣れてくると感覚で小さい字も書く。

ゆうさん

筑波を見学した時に自分もびっくりした。感覚で書くので書く字が小さいから見えてるだろうは違う。

参加された会員の皆さまへ

いつもアンケートにご協力ありがとうございます。結果としては概ね好評であり世話人としてはホッとしております。記入欄にたくさんのご意見、感想をいただいておりますが数値のみ以下に掲載します。意見等については今後の会報などで掲載またはホームページでご紹介していきたいと思っています。

平成27年度 全国拡大教材勉強会 アンケート集計結果

回収総数 62 (内訳：全国拡大教材会員=42、会員外=7、未記入=13)

①企画内容について

(良い=59、良くない=0、どちらともいえない=3 ☆記入欄への書き込み=20)

②講師について

(良い=59、良くない=0、どちらともいえない=1、未記入=2 ☆記入欄への書き込み=28)

③講演時間について

(長い=2、ちょうど良い=58、短い=1、その他=0、未記入=1 ☆記入欄への書き込み=10)

④拡大写本に関する、現在の関心事 (記入欄への書き込み=39)

⑤世話人会への要望 (記入欄への書き込み=25)

神奈川県拡大写本連絡協議会(県拡大) 秋の勉強会

(平成27年10月10日(土):神奈川県ライトセンター)

今回の勉強会は、テーマを『拡大写本を知っていただくための啓発活動』とし、拡大写本の啓発、啓蒙活動、学校等での福祉教室や各地、各自治体で催されるイベント(「〇〇ふれあいフェスティバル」とか「〇〇福祉まつり」といったもの)に、拡大写本のグループがどのように関わって、どのような展示や体験をしているか、していただいているかを個々のグループ毎で発表した。

グループの成り立ちや活動範囲は様々であるが、殆どのグループが何らかの形で福祉教室やイベントに参加していた。

文字を写し書きする、間違いを探す、製本するといった「拡大写本製作の体験」や弱視ゴーグルなどを使った「弱視体験」、製作物の展示、会のパンフレット配付などを行っているグループが多かった。

小学校の福祉教室で障害者の感覚を少しでも体験してもらえるのは、次世代を担う子ども達にとって得難い経験であろう。イベントでの展示、体験は拡大写本をよく知らない方々に拡大写本を知ってもらう数少ない機会である。他グループの実践を見て、自分達の活動に取り入れられる事があれば取り入れたい。

11月14日には神奈川県ライトセンターフェスティバルにて県拡大も一部屋スペースを頂き、拡大写本の展示や製本体験などを通して啓発活動を行った。



↑ 県拡大勉強会(資料展示等の説明)



↑ 11/14 ライトセンターフェスティバルにて 県拡大 展示、体験



全国拡大教材製作協議会の掲示板ができました。

全国拡大教材製作協議会のホームページに会員の掲示板が登場しました。利用については各会員へメールなどで既にお知らせしております。会員であればどなたでも利用できます。忌憚なきご意見、聞いてみたいことなどご自由に書き込みください。なお、不明な点などありましたら世話人会までお問い合わせください。

現在のグループ数 55グループ (平成27年 12月現在)
入会 写本橋 (平成27年9月)

27年度世話人会日程

- 1月27日(水)
- 2月24日(水) 3月23日(水)
- ・原則として第4週水曜日 午後1時半から
(どなたでもお気軽にご参加ください)
- ・場所 東京都障害者福祉会館 東京都港区芝5-18-2
- ・交通 JR 田町駅 下車 徒歩3分
都営地下鉄三田線 浅草線 三田駅下車 すぐ

《編集後記》

年末です!また新しい年がやってきます。そして新年度に向けて会員それぞれに教科書作りが慌ただしく進められていることでしょうか。暖冬とは言われますがやはりインフルエンザや風邪が話題になってきました。どうかご自愛くださいますように。(らま)

